

草創期の名古屋大学と 初代総長渋沢元治

神谷 智
(協力:名古屋大学博物館)

草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治

神谷 智

(協力・名古屋大学博物館)

目 次

| | |
|------------------------------|----|
| はじめに | 2 |
| 一 「名帝大けふ誕生」 | 3 |
| 《コラム》 整流器ベルトローある数学者の夢 | 10 |
| 二 東山キャンパスと研究組織の整備 | 13 |
| 《コラム》 国産初の商用電子顕微鏡HU-2型が設置される | 25 |
| 三 戦時下の学生生活と研究 | 28 |
| 《コラム》 岡崎高等師範学校(岡崎高師) | 41 |
| 四 渋沢元治 ―生い立ちと人柄・思想― | 43 |
| おわりに | 57 |

はじめに

名古屋大学の各学部における創立年はまちまちです。たとえば、医学部は前身の仮病院・仮学校が作られた一八七一（明治四）年においていますし、経済学部は同じく前身校である名古屋高等商業学校が設立された一九二〇（大正九）年を創立年としています。名古屋帝国大学（旧制名古屋大学）になってからできた学部では、工学部は理工学部が発足した一九四〇（昭和一五）年、理学部は理工学部が分離した一九四二（昭和一七）年、文学部は一九四八（昭和二三）年、法学部は新制後の法経学部が分離した一九五〇（昭和二五）年です。新制大学になつてからでは、教育学部が一九四九（昭和二四）年、農学部は一九五一（昭和二六）年、情報文化学部は一九九三（平成五）年を創立年としています。

ただ名古屋大学全体としてはその創立を、名古屋帝国大学が発足した一九三九（昭和一四）年においています。東京・京都・九州・東北・北海道・京城・台北・大阪につづく九番目の、そして最後の帝国大学でした。この名古屋帝国大学草創期は十五年戦争中でもあり、資金人材などさまざまな面で苦難の連続でした。本書は、この名古屋大学の草創期Ⅱ名古屋帝国大学の

時期について、その多くの期間を初代総長として務めた渋沢元治の努力を交えながら、紹介していきたいと思います。なお記述の都合上、本文中の敬称を略しています。また「澁澤元治」が正しい名前ですが、ここでは一部の名称を除いて「渋沢元治」の表記に統一しました。

一 「名帝大けふ誕生」

◆総合大学への道

名古屋に総合大学を招致しようという動きは、一九一八（大正七）年ごろから本格的にはじまりました。それまで官立（現在の国立）の帝国大学しか認めていなかった大学枠を緩和する大学令が施行されたことが大きな要因でした。この時期の日本は、第一次世界大戦による好景気もあって、都市に人が多く集まり、従来の市街地の周りに新市街地ができ、都市空間が飛躍的に拡大していきました。そこにサラリーマンなどの都市中間層が居住し、彼らや彼らが働く企業を中心として教育への要求が高まり、それに対応した教育諸政策が実施されましたが、大学令の制定もその一つでした。



【図1】1939年 名古屋帝国大学になる直前の名古屋医科大学
(付属図書館医学部分館提供)

当初この地域では、愛知県立医学専門学校（名古屋大学医学部の前身校）を官立大学に昇格移管することをめざしていました。はじめから帝国大学のような総合大学をめざしていたのではなく、まずは官立の医科大学⇨単科大学を設置することからはじまったのです。愛知県会の意見書採択にはじまり、職員・在校生や校友会・同窓会を中心に、一般市民の賛同を得るため新聞界などをも巻き込んで昇格移管運動が展開されました。この間、県費から百万円を政府に寄付するので官立にしてほしいという要求もおこなわれましたが、結局政府に拒否されてしまいました。そして県立のまま一九二〇（大正九）年に、この地域における初めての大学⇨愛知医科大学が設置されました。

つぎの総合大学設置運動は一九二六（大正一五）年末頃から、この愛知医科大学を中心としておこります。翌年二月、医科（愛知医科大学からの移管を予定）と工科からなる総合大学の設立をめざす「名古屋総合大学期成同盟会」

が発足しました。同盟会は政府へ陳情するほか、衆議院・名古屋市会・愛知県会へ働きかけ、意見書を建議させたりしましたが、それ以降行き詰まり、運動は停滞しました。一九三〇（昭和五）年大阪に官立総合大学（大阪帝国大学）を創設する計画が伝えられると、この地域においても、総合大学ではありませんが、愛知医科大学を官立移管する方向で運動が再開されました。そして県が国に毎年五万円を寄付することを条件に、翌一九三一（昭和六）年官立移管が実現しました（官立名古屋医科大学）。あとは「総合大学設置」Ⅱ「名古屋帝国大学設置」だけが最後に残された課題となりました。

田村春吉が名古屋医科大学の学長に就任すると、ただちに総合大学の創設が急務であると提言、具体案として、名古屋医科大学を基にした医学部と、戦時下で軍用技術の優先ということもあつて理学部・工学部を加えた、三学部からなる総合大学創設案を策定しました。これをもとに各方面に働きかけがなされ、また世論の喚起もおこなわれました。県知事が博物館を建設すると発言したことに對して、田村学長は博物館より大学設置をと切り返したこともあつたほどです。一九三八（昭和一三）年七月には名古屋総合大学設置期同盟会も発足しました。その後文部省大蔵省との折衝ほか紆余曲折を経た後、翌年二月に衆議院議会で、創設費用九百万円を愛知県が政府に納入寄付することを条件に、同年四月に医学部と理工学部の二学部からなる名古屋帝国大学が創設されることが、決議されました。



【図3】1943年 前首相近衛文麿の直筆の書「以和為貴」を掲げた総長室の渋沢

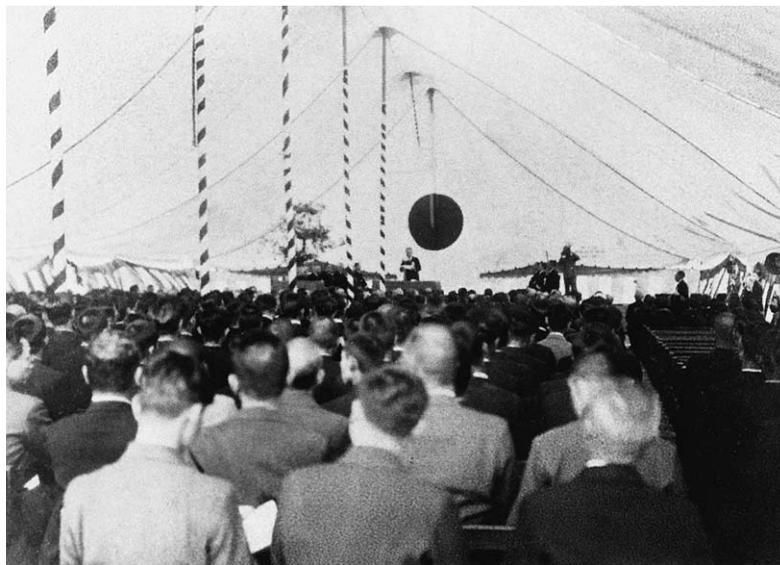
が、結局人選は文部省や設立準備調査会委員中心に進められ、最終的に創立直前の一九三九（昭和一四）年二月末に元東京帝国大学工学部長の渋沢元治に決定しました。

◆創立記念日と開学式

一九三九（昭和一四）年四月一・二日の各新聞には「名帝大けふ誕生」などの見出しが踊っています。三月三十一日名古屋帝国大学官制が公布され、翌一日から実施されたためです。「非常時総長」とも新聞に書かれた渋沢は、三日名古屋に入っています。その際の抱負として、一

般論としては人材の要請をあげる一方で、実際の課題としては、建設経費の確保と理工学部の開設準備を繰り返し述べています。第二章で述べるように、この時期の渋沢の思いはここに率直に表現されています。

四月一四日の入学式では、医学部のみの新入生約八十名に対し、総長告辞を述べています。渋沢はここで、教育とは外



【図4】1943年 開学式（5月、永田直明氏提供）

から詰め込むことではなく人を啓発することであり、ことに大学はこれに力をそぐべきであると述べています。また教育勅語にふれる一方で、イギリス・ドイツ・アメリカの教育も平等に評価しています。このあたりに渋沢の当時の考え方をうかがいしることができます。

五月二八日には名古屋商工会議所で、医学部学友会主催の名古屋帝国大学創立祝賀会が開催されていますが、まだこの時期は医学部があるだけです。理工学部が発足した翌年五月一日に名古屋帝国大学としての第一回創立記念式を行っています。創立記念日を五月一日にしたのは、前身の名古屋医科大学がこの日を開学記念日としていたからです。なおこ

れを機に、洪沢の座右の銘である「以和為貴」（聖徳太子の十七条憲法の第一条）の書を総長室の額として掲げ、大学全体の座右の銘としました。

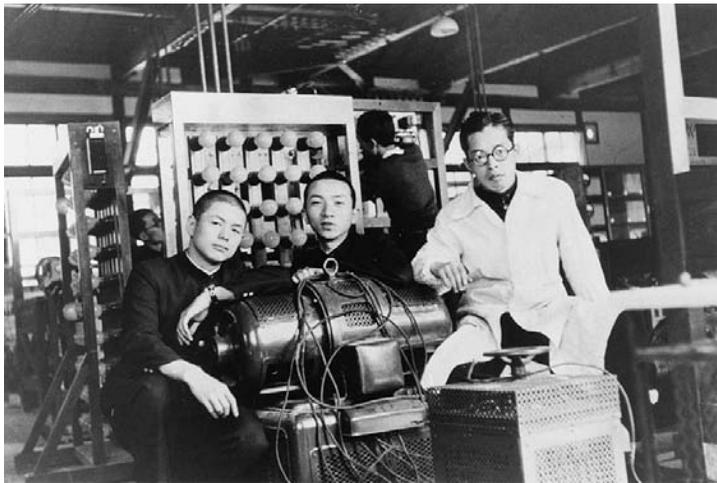
開学四年後の一九四三（昭和十八）年五月一日の創立記念日は、名古屋大学の開学式となりました。医学部学友会から寄付があつたこと、前年度に医・理・工の三学部が揃い、かつ工学部が第一回卒業生をだしたことなどの理由によります。洪沢個人としては、おそらく名古屋帝国大学が一応大学としてある程度の軌道に乗つたという、安堵感があつたかもしれません。それほど、この戦時中に大学を立ち上げ軌道に乗せるには、多くの課題がありました。そこでつぎの第二・三章で、その名古屋帝国大学初期の課題を、洪沢の総長としての仕事とともにみていきたいと思ひます。

《コラム》整流器ベルトーロ―ある数学者の夢

整流器とは、交流電流を直流になおす装置です。ベルトーロ (Verloro) は、変換・転換器を意味する英語（インバーターなど）の語尾「バーター」をエスペラント読みして、発明者の椎尾詞（しいおひとし）が名づけました。

椎尾は、名古屋大学の前身校のひとつ第八高等学校（八高）在学中、交流モーターで直流発電機を回して市電用の直流を作っているのを見て、もっと効率のよい整流器の開発をこころざしました。東京帝国大学理学部数学科在学中の一九一八（大正七）年に特許出願し（二年後に許可）、母校八高に赴任してから十数年にわたって私財をつぎこみ実用化をはかりました。一九三六（昭和一一）年、地元メーカーによる製品化が軌道に乗った矢先に四十一歳で死去しました。椎尾は「正しいと思い、良いと思ったことは、その時、その場で行え」をモットーに、二進法やエスペラント語、ローマ字の普及、学校給食や奨学金の実現にも努力しました。「八高数学」の伝統を築いたリベラルな教育者としても評価されています。

ベルトーロは、以後一九六八（昭和四三）年まで海外向けを含め計七千五百四十五台が出荷され、金属メッキ、電池充電、放送局の真空管や映写ランプの電源などに広く利用されました。



【図5】現在博物館にあるベルトオーロ(上)と戦前の西二葉町校舎にあったベルトオーロ(下、石岡繁雄氏提供)

上は名古屋大学工学部電気系で学生実験で使用されてきたもので、名古屋帝国大学創設当時に使われた機種(下)と同じく下部に油槽をもつ油冷式であり、ベルトオーロのごく初期の型です。

海外特許も取得するなど、当時としては優秀な器械でした。なお、名古屋大学工学部では戦後まもなく、ベルトローロの回転部分から出る放電火花を減らすための改良研究が行われたようです（近藤守信氏の私信によります）。

（名古屋大学博物館・西川輝昭）

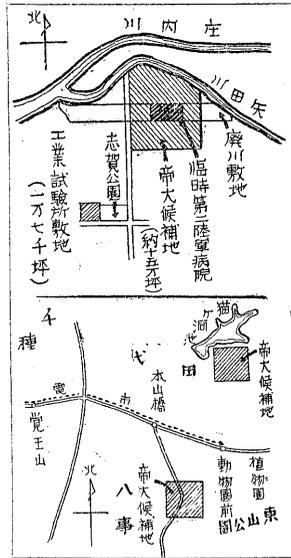
二 東山キャンパスと研究組織の整備

◆ 東山新キャンパスの決定

初代総長に就任した渋沢には、新設大学としておこなわなければならない課題が山積していました。なかでもすぐに着手しなければならない仕事として、大学の環境整備と新学部である理工学部の設置準備がありました。

大学の環境整備では、新キャンパスの決定とその整備がありました。新キャンパス建設地の決定は建設費用算定にも関係するため、総長決定と同様、大学設置が決定される以前から新聞紙上で取り沙汰をされていました。すでに一九三八（昭和一三）年三月の時点で、愛知県は矢田川廃川敷地を、田村名古屋医科大学学長は覚王山や八事方面の名をあげていました。その後鳴海町なども地元への大学誘致運動を展開したため、この敷地問題により逆に大学設置が中絶されることを危惧した県は、一時敷地決定は文部省に一任するという態度をとりました。

その後名古屋帝国大学設置予算が大蔵省で認められた直後に文部省関係者が秘密裏に來名し、敷地を实地踏査した結果、一月一二日には「東山、八事の間二十万坪」が大学の敷地とし



【図6】1939年当時の名古屋帝国大学新キャンパス候補地図（名古屋新聞掲載、中日新聞社提供）

合が無償提供を決定したと新聞に再報道されたため、土地価格が暴騰し、一部個人地主が土地区画整理組合への譲渡を拒み、問題はますます紛糾し、土地取得は逆に暗礁に乗り上げてしまいました。

結局名古屋帝国大学の新キャンパスの建設が正式に東山に決まったのは、一九四〇（昭和一五）年秋のことです。この間、物価が騰貴し資材も逼迫したため、コンクリート建築などができなくなり、また建設がますます遅れるなど、当初計画通りにはできなくなったことを、渋沢は「返す返すも遺憾であった」と悔やんでいます。

て決定したと新聞報道されました。ところが、秘密裏だったがゆえか、逆に一部地元の土地所有者の反対にあつて土地譲渡は順調にはまともならず、正式な決定はさらに遅れることとなりました。そのうえ翌年の五月にも東山新キャンパスに地元の八事・伊勝・田代の土地区画整理三組

◆内田祥三のキャンパス計画

キャンパスを東山に内定した直後、渋沢は東京帝国大学工学部建築学科教授内田祥三に東山新キャンパス建設計画を依頼しました。内田はこの時日本建築学会会長であるとともに、東京帝国大学営繕課長事務取扱を兼任していました。じつは渋沢は、すでに総長受諾直後の三月一日に内田のもとを訪問、大学校舎建築計画につき「教えを乞う」ています。当時は、官庁用建築新営はすべて大蔵省営繕管財局がおこなうことになっており、大学では新営はできませんでした。しかし大学の建築は特殊であり、教育上必要な大学側のいろいろな希望を建築に取り入れて貰うために、内田を顧問に委嘱して種々意見を聞き、その希望を大蔵省の担当技術者に申し入れることとしたといっています。

内田が実際に名古屋へ視察に来たのは六月一日といわれています。その時図面メモを書き、写真も撮っています。その図面には大正年間から進められた区画整理事業に基づく街路網が書かれ、後に大学の職員学生集会所「恵風亭」となる御堂「和光寮」が、鏡が池南に「卍」で書かれています。

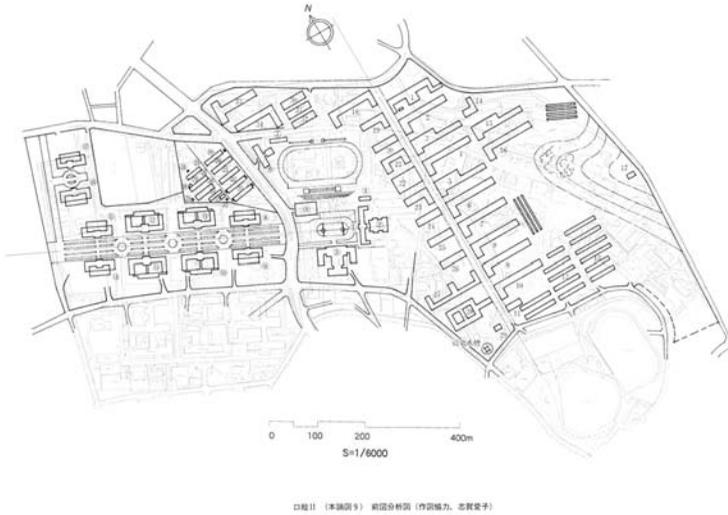
この視察の後、内田は鶴舞の医学部に立ち寄り田村医学部長に面会しました。そこで、田村から東山キャンパスの建物配置案が示されます。医学部附属病院の病棟建物案で、直線上に配



【図7】1939年 内田祥三の東山キャンパス検討図（木方十根氏による訂正図）キャンパスを円形近くという内田の意図がうかがえます。

置するものであり、これは愛知県営繕課の作成によるものと思われる。また別にこれと前後して愛知県都市計画課が作成した敷地地形図および下図も内田に渡されたようです。内田はこの図に書き込み線を入れており、それは現在の細長い敷地ではなく、もう少し丸形の敷地を描いています。のちに大蔵省から愛知県へ「細長いからもつと丸型の地域にして欲しい」との要望が出ていますが、これはどうやら内田の意向によるものと思われます。なおこの夏頃、東山キャンパスの模型が大蔵省で作られ、これによつて理想的建築原案が作成されましたが、詳細は残念ながらわかっていません。

しかし、前述したように用地取得が遅れたこともあり、内田の案は実施には向かいませんでした。内田自身も「敷地の決定は実に難しいもので、この調子ではなお一年あまりの時日を要するであろう」と述べていたようです。その後内田は総工事費の検討などしていますが、東山キャンパス計画から徐々に手を引いて直接には関与しなくなつたようです。



【図8】1940年 名古屋帝国大学全体計画図（木方十根氏による訂正図）

◆一九四〇年のキャンパス計画

内田の計画着手から一年後の一九四〇（昭和一五）年八月末に、最初の東山キャンパス計画案が作成されています。キャンパス中央に講堂を建て、その裏に本部、その南西に図書館が配置されていますが、これは現在の豊田講堂・事務局棟（旧本部）・古川総合研究資料館（旧古川図書館）とほとんど同じです。また講堂前からキャンパスの西端まで、中央街路が一直線に通っていますが、これも現在の中央グリーンベルトとよく似ています。山手通りの西に理学部と工学部の建物が計画され、東にはグラウンドが書かれています。現在の理学部や工学部四・五号館あたりになりますが、現在の総合グラウンドができる前は、実

際ここに運動場がありました。そしてさらにその東、講堂・本部の東（現在の農学部・付置研究所付近）に医学部やその附属病院が計画されています。

この計画のうち、中央街路や医学部の諸施設の配置については、敷地の高低に対して充分な配慮がされていません。特に医学部や附属病院の建設は、建築学的には困難な設計のようです。この計画図は、建築家の発想ではなく、都市計画の発想から作成されたと考えられます。このような理由から、この一九四〇年のキャンパス計画は、建築学を専門にしている内田の作成によるものではなく、渋沢周辺すなわち名古屋か愛知の都市計画関係の技術者によって作成されたものと思われます。

以前、名古屋市街の中央にある百メートル道路はこの名古屋大学のグリーンベルトにつながるといいうわさを耳にしましたが、ともに都市計画的な発想という、このあたりに案外根拠をもつものかもしれません。

◆本多静六の植樹調査

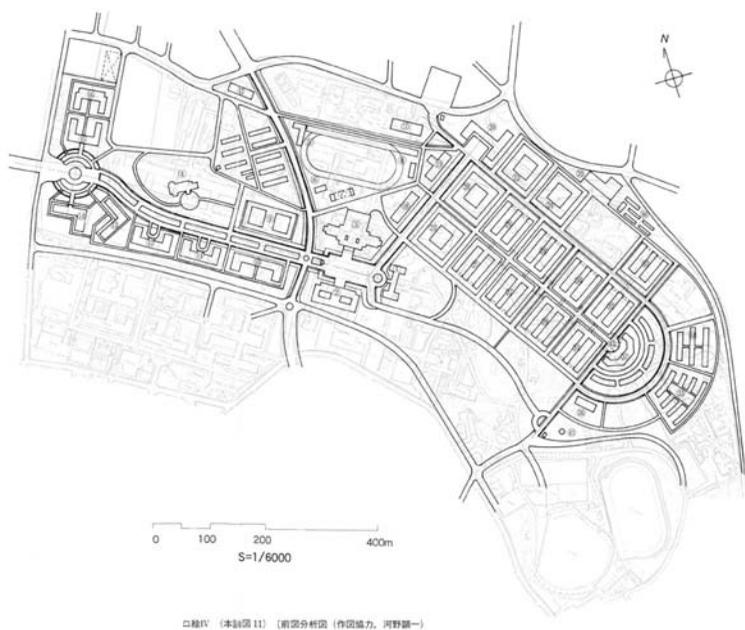
渋沢は『名大史ブックレット2』でも紹介しましたように『緑の学園』を構想しており、とくに植樹に力を入れて、大学の風致を高めようとしていました。そのため東京帝国大学林学科教授本多静六らに土質・植樹の調査を依頼しました。これは一九四〇（昭和一五）年一月三日か

らそのような発想はありました。

また鏡が池を利用して西側境界線に沿って正門前に幅約十間から十五間のカナル（堀）を設け、「俗界」と大学を区分するようにしています。正門をキャンパスの西につくることは渋沢が残した引継書においても確認でき、大学をきちんと囲う発想がここにはありました。現在の門や塀があまりない、開かれたキャンパスとは全く反対の考え方です。一方で鏡が池とこのカナルに約十尺の落差を利用して滝を落とし、水景に変化を与えるようにとも書かれており、その中でも自然の風景を大切にしようという発想も維持されていたようです。この鏡が池周辺を風致地区にと考えたように思われます。なお、この報告書には「けやき及くすの二種」を中央街路樹として使用することも書かれていますが、現在のグリーンベルトの並木には、けやき・くすがその通り植樹されています。

◆一九四二年のキャンパス計画 — 内田案の復活 —

本多の提言は、一年後の一九四二（昭和一七）年一月のキャンパス計画案に反映されます。これは名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）建築科教授広川誠三郎によって作成されたと考えられています。広川は、内田が名古屋帝国大学の名古屋の現地における営繕担当者として選出しようとしていた研究者の一人です。ですからこの計画には内田の意向が反映されている



【図10】1942年 名古屋帝国大学計画案(木方十根氏による訂正図)

と考えてよいかと思います。

中央街路は本多の提案通り十六間に縮小され、西端は敷地の高低差を和らげるため北側へ半円弧を描いて曲がっており、それがキャンパス西側正門前のロータリーへつながっています。講堂が中央街路東端から北側へ移され、鏡が池南側は工学部建物建築をやめ風致地区にして、職員学生集会所を建てようとしています。実際前述したように、この時期「恵風亭」という集会所が作られています。医学部も建設地区は変わりありませんが、建物配置を単なる直線平行型から、突き当たりの東南部を半円形のロータリー型の街路と建物配置に変えて、この地区の高低差の問題に配慮しています。こうした構成法は、内田が都市計画などにおいてよく採用していた方法でした。

この計画案では、たしかに中央街路の配置そのものは四〇年の計画案と同じく継承されていますが、広幅員で直線的な中央街路によって作られる空間的な特質は失われてはいません。建築端の内田・広川らは、都市計画端の四〇年の計画案を踏襲することはあまり考えなかったようです。なぜこのように東山計画案が二転三転したのかは、今のところよくわかってはいません。ただ結局戦後のある時期まで、この四二年の計画案に沿って、東山キャンパスが建設されていきました。

◆理工学部の設置準備

名古屋帝国大学創設の際、渋沢に負わされたもう一つの緊急課題は、翌年創設される理工学部の設置準備でした。具体的には教員の招へいと講義実験用諸設備の用意と仮校舎の改築工事がありました。

一九三九（昭和一四）年総長を承諾した直後、渋沢は創立委員会に東京帝国大学教授の西健をメンバーとして入れるよう当時の文部次官に要請し、三月七・八両日にわたって当の西と、理工学部の仮校舎の改築工事と設備について打ち合わせをしています。また三月一四日には東京帝国大学工学部長丹羽重光を訪問し、機械工学を専門とする名古屋帝国大学工学部長として適任の候補者の推薦も依頼しています。先の東山キャンパスの設計と同様、すばやい動きといえます。このほか長岡半太郎や本多光太郎など、当時の著名な研究者に教員スタッフの人選を依頼しています。五月には榊米一郎や恩田格三郎を来年助教授に任命する内約をして、東京と名古屋との連絡交渉やその他の準備事務を依頼しています。このようにして、翌年度発足の理工学部の教員スタッフを整えていきました。

機械器具材料についても、先の方々に要請して、彼らと友人関係にある製造会社重役に依頼し、代金後払いで購入できるように便宜を諮ってもらっていたようです。仮校舎仮教室の設計もとりあえず第一学年の教育に必要な準備をすることを主眼と早急にすすめました。わずか一

年という短い期間で、とりあえず理工学部の発足にこぎつけることができたのは、このように、渋沢の東京時代の人脈、とくに東京帝国大学の教員スタッフが大きな力になっていったといえます。そのほか九月には、自分の蔵書の大部分を名古屋帝国大学に寄贈しています。多くは専門である電気に関する雑誌や書籍でした。

◆航空医学研究所の設置

飛行機の高空飛行や急降下の際の生理現象を医学的に解明することは戦時体制下では急務でした。渋沢は名古屋の地が日本の航空機製作の中心であり、また各種飛行場も近在しているため、この航空医学を名古屋帝国大学が理工学部と医学部の協力によっておこなえば、さらに発展させることができると考えていました。すでに昭和一五年度予算の折衝で航空医学研究所の設置を要求し、大蔵大臣にもその緊急性を説明しましたが、創設一年目であることもあって認められず、その代わりに医学部に航空医学講座二講座が、一九四〇（昭和一五）年五月に増設されました。

この講座の三年間の実績の上に、一九四三（昭和一八）年二月に航空医学研究所が附置され、先の医学部二講座が移管されました。渋沢は総長とともにこの研究所長を兼任することとなりました。その後この研究所は徐々に整備され、最終的には七部門からなる研究所体制ができました。

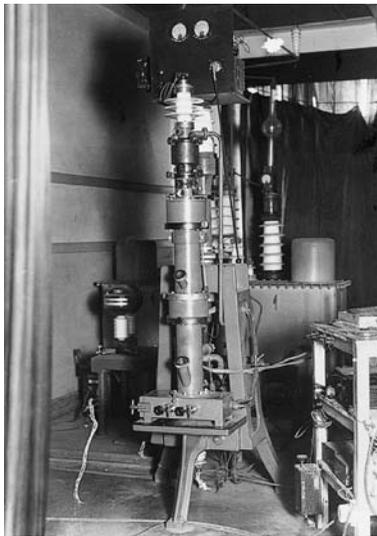
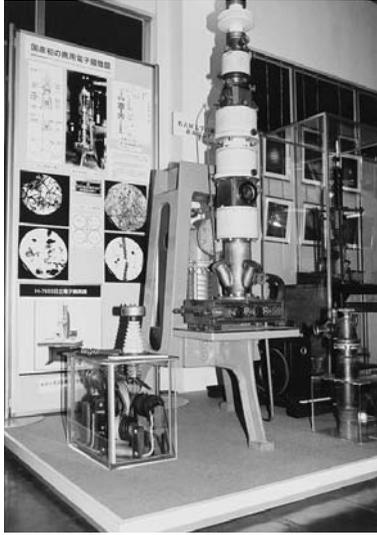
《コラム》国産初の商用電子顕微鏡HU-2型が設置される

名古屋帝国大学創設のおり、当時の最新設備として電子顕微鏡が選ばれました。医学部では細菌学講座がかねてから、光学顕微鏡では見えないウイルス等の観察のために電子顕微鏡を強く要望していました。ドイツ製品の導入も検討されたといわれています。

日立製作所における電子顕微鏡の試作第一号機HU-1は鏡筒が横型のため機械的振動を受けやすく、実用に適しませんでした。商用として国産初となる第二号機HU-2は、二台が製作されました。その一つが一九四二（昭和一七）年一二月に名古屋帝国大学に設置されたわけです。

渋沢総長は前年一二月、同社の中央研究所で製作担当の笠井完所長より新型の電子顕微鏡の説明を受けた際、まもなく完成するもう一台は名古屋帝国大学にあげるつもりだ、と聞かされました。乏しい財政ではとても購入は無理だと答えましたが、結局、笠井博士の尽力と「小平社長の厚意で本学予算の許す範囲の値段で極めて安価に得て東山工学部実験室に据え」ることになりました（渋沢、一九五三）。

まもなく、工学部榊米一郎助教授（現名古屋大学名誉教授）を中心に全学的な共同研究が始



【図11】 現在博物館にあるHU-2型電子顕微鏡(上)と
1942年当時のHU-2型電子顕微鏡(下)

まり、その成果は一九四三（昭和一八）年九月、日本学術振興会の第十常置委員会第三十七小委員会の第二十七回会議の席上、榊委員により発表されました。「五酸化バナジウムコロイド」「酸化亜鉛」「カオリン（ツェットリッツ）」「ワクチンウイルス」などの写真がその記録として残っています。戦後、電子レンズを追加し、性能のよい真空ポンプに付け替えるなどの改良がなされ、一九五五年頃まで活用されました【図11】。

このHU-2型は、名古屋大学の電子顕微鏡研究開発の原点となりました。より高い透過力を求めて、一九五〇年代には加速電圧二〇〇および三〇〇キロボルトの超高圧電子顕微鏡が創られ、一九六〇年代には五〇〇キロボルト商用超高圧電子顕微鏡としての第一号機が名古屋大学に設置されました。

（名古屋大学博物館・蛭薙観順）

三 戦時下の学生生活と研究

◆ 学生寮の確保と総長懇談会

学生生活も困難を究めていました。第一次大戦後の重工業化につれて、名古屋も工場労働者数が増えましたが、それに対応できる住宅施設の整備は整っていませんでした。ましてや学生を対象とした下宿は、戦時下ということもあって、恒常的に不足していました。洪沢は、この下宿不足の対応にも努力し、一九四二（昭和一七）年一月に空き家を借り入れて、十数名の学生を入寮させました。「すくすく伸びよ」という意味で洪沢自ら「菁々寮」と命名し、また論語の「進吾往也」や陶淵明の「園日涉以成趣」を書にした掛軸を寮に贈って掲げるなど、洪沢が寮生によせた期待の程がうかがわれます。

洪沢はこの際、「学生と共に豚鍋でもつき合い懇談会を開いて余も本学建設の抱負から体験談など語り、また学生諸君からも希望や意見をきく機会を与えたならば相互に意志疎通の道を開いてこの困難なる時局下の教育に資する所あらん」と考え、この寮内で学生との懇談会を開催しました。学生から「総長懇談会」と名付けられたこの会は、二月二一日に第一回が開か



【図12】学生寮に掲げられた洪沢の直筆の書「進吾往也」（左、市川茂雄氏提供）と1942～3年頃の総長懇談会（右、本多重吉氏提供）

れ、七月まで約十数回開かれたそうです。のべ二百名余りの学生が参加しており、また教授・助教も参加し、食費は洪沢のポケットマネーから支払われたそうです。

しかし寮では狭くて一回に十数人ほどしか参加できず、一年から三年生の全学生にまで行き渡るには回数を数多く重ねなければなりませんでした。それはただでさえ多忙な洪沢にとつても負担であり、また豚も思うように得られなくなってきたようでした。そこで翌年からは総長懇談会は本部会議室で開催されるようになり、一回に約四十名ほどを集めて、今度は弁当を食べながらおこなわれたようです。毎回同じような話をするので、そこで洪沢は、その内容を書いた小冊子『我等の学園』を学生に配付し、懇談会ではこれに説明・補足を加えるような形で



【図13】1942年頃 理工学部での軍事教練（本多重吉氏提供）

話をしました。このようにして、学内の人的交流の活発化をはかっていったのです。

◆軍事教練と勤労働員

名古屋帝国大学が創設された一九三九（昭和一四）年は、大学などの高等教育機関の学生生徒に対する軍事教練が強化された年でもありました。軍事教練は毎週二時間の必修となり、各個部隊教練・射撃・指揮法からなる術科（実地教練）と戦史・戦術・軍事講話からなる学科が教えられていました。

これについて渋沢は、だいたいつぎのように回想しています。

これ以前東京帝国大学にいた頃は、軍はたしかに実地教練をすることを要求してきただが、大学側は、高等学校までに実地教練

を修得してきたのだから、大学においては将校としての学科だけにしたいと主張した。結局学生が数千人もおり実地教練は実行不可能であったため、大学側の主張通り学科だけを行っていた。しかし名古屋帝国大学においては学生数も少なく、また愛知医科大学時代から実地教練が行われていたため、前記の軍事教練の強化指令はかなり厳格に守られていた。しかし、学生は本来の医学・理工学に関する専門技術実習に相当の時間をかけるため、軍事教練に時間を多く割くことはできず、またしなかった。そのため学生に軍人と同様に教練を要求する軍査閲官の場合、その講評はきわめてかんばしくなかった。

この渋沢の回想から、この当時の戦時下における軍と大学（ないしは大学人）との微妙な関係がみえてくるようです。

勤労働員も一九四一（昭和一六）年頃からはじめられています。一・二年生が、七月に東山キャンパスにおいて整備作業に、一〇月には高蔵寺の陸軍補給廠（現春日井市）で擲弾筒製造作業に動員されています。勤労働員が本格的になったのは一九四三（昭和一八）年頃からで、前年末から一月にかけて、臨時附属医学専門部の学生が防空監視所の建設工事に動員され、また各学部の学生が高蔵寺の飛行場建設作業に従事していました。秋には医学部学生の勤労作業として、名古屋造兵廠従事者の血液検査を実施しています。

名古屋帝国大学としては、勤務先が名古屋地方の場所であること、高学年は医・理・工のそ



【図14】1942年頃 医学専門部学徒報国際の
無医村診療奉仕活動(石橋正氏・吉川一弥氏提供)

の特技を生かせる業務・職場を選び、低学年はそれ以外の業務・職場に従事することは止むを得ないとするものの期間は二ヶ月以内、という方針をもっていました。しかし渋沢の回想によれば、勤労働員においてなるべくその特殊技能を活かせる科学的奉仕ができるよう配慮したが、緊急を要する場合は単なる労力奉仕も避けられなかったといえます。またその作業内容についても、たとえば飛行場建設作業の際の設備が「原始的なる」もので、これでは人力が多くかかるため、機械化をして人的動員を節約する方法も考えたが、

資材がなく断念せざるを得なかったと悔やんでいます。勤労働員においても理工の学生にふさわしい機械化された作業内容であつてほしく、かつ機械化によって勤労働員を少なくして、本来の研究にもどれるようにと考えていたのでしよう。

なおこのほかにも、文部省の指導のもとに、学内にあつた校友会が「報国会」として再組織され、

また総長以下学生生徒にいたるまで全校で編隊される「報国隊」も結成されました。これらは奉仕活動のほかに、「シンガポール陥落祝賀行事」「勅語奉読式」をおこなうなど、戦時下における国威高揚の役割も果たしていました。

◆空襲と病院防空と研究室疎開

防空対策については、太平洋戦争がはじまった直後の一九四二（昭和一七）年一月一七日に文部省から各学校へ防空計画について報告するよう依頼があり、名古屋帝国大学でも「名古屋帝国大学防空計画」が策定されました。その後、実際に空襲がはじまると、一九四四（昭和一九）年八月には新しい防空計画に改正され、防護団組織・避難計画等が詳細具体的に取り決められていきました。

空襲は一九四四（昭和一九）年末から激しくなりましたが、医学部は附属医院が空襲下の名古屋市民のもっとも重要な治療機関であったため、疎開することがなかなかできませんでした。そのため一九四五（昭和二〇）年三月一二日・一九日・二五日の三度にわたる空襲で、多大な被害をうけてしまいました。医学部関係の建物は図書館を除いてほぼ全焼、附属医院も約半分が焼失し、罹災面積は六三パーセントにも及びました。しかし、前述した防空計画Ⅱ既定の避難計画がしっかりしていたため、三回とも入院患者が直接負傷するような事故はほとんどな



一 病院
 戦況と戦訓
 医学部空襲の戦況と戦訓
 昭和二十一年四月一日、本学医学部が空襲を受け、建物は全壊し、多くの被害者を出した。この戦況と戦訓を、戦後、医学部関係者によって調査・整理された。この資料は、戦後、医学部関係者によって調査・整理された。この資料は、戦後、医学部関係者によって調査・整理された。

昭和二十一年四月一日
 医学部空襲の戦況と戦訓

【図15】1945年 医学部空襲跡（左、付属図書館医学部分館提供）と「病院防空一戦跡と戦訓」（右）

かったようです。

医学部ではその時の状況（戦跡）を教訓（戦訓）とした「病院防空一戦跡と戦訓」が策定されました。医院長勝沼精蔵と事務長山元昌之が当時のガリ版で作成した冊子が残っており、右肩に「秘」の記載があります。これには水・食糧の備蓄と配給、防護当直員の配置、連絡用自転車・物品運搬用の木炭自動車の確保などのライフラインの維持とともに、患者の避難方法や後方病院の用意、防護団の充実など人的問題も指摘されています。

一方この空襲を機に、その対策として研究室の疎開が本格的具体的に進められるようになりました。四月一日には、研究施設などの疎開方針が定められ、翌二日には文部大臣が名古屋帝国大学の被害状況を視察し、疎開を促進するよ

う強調したといわれています。理学部・工学部は、前述の三月の空襲では運よく被災を逃れていました。その後の四月一九日の評議会で研究施設の疎開について話し合われ、短期間に実施されました。その範囲は東海・北陸・長野のほか奈良・新潟まで広範囲に及びます。

ただこの間の空襲では、東山キャンパス付近にあった高射砲の陣地を目標に爆弾が投下されました。そのため東山キャンパスの校舎は直撃はのがれたものの、建物自体が戦時規格のものであったため、振動や爆風により窓ガラスが割れたり、屋根瓦や天井裏が多く落下してしまいました。さらに五月一日の大空襲では、西二葉町の工学部校舎や東山キャンパスの大学本部事務室・学生集会所・理学部生物学教室・航空医学研究所などを焼失してしまいました。しかし先の研究室疎開がこの間短期間でほぼ終了していたため、物的被害は最小限ですみました。

◆戦時下の研究

一九三七（昭和一二）年七月に日中戦争が全面化すると、文部省では翌年二月に「科学動員協議会」（渋沢もこの委員の一人でした）が、四月には「科学審議会」が、八月には「科学振興調査会」がと、次々に科学振興のための調査審議機関が作られていきました。その結果、翌年三月には文部省の科学研究費交付金が創設されました（初年度は三百万円）。名古屋帝国大学でも昭和十五年度に、医学研究に対して五万円近くの交付金を受けました。また一九四三

(昭和一八)年九月には「戦時科学研究会」が学内に設置され、戦時下に対応する科学研究体制をとっています。

一方戦時下であつても、各学部や学科では独自の研究活動もおこなわれていました。たとえば理学部化学科では「業績報告会」「化学談話会」などの研究会が開かれていました。前者は物理学科の学生も参加しており、軍事研究もわずかででした。後者は研究発表や論文紹介のためにほぼ週一回おこなわれていました。

ただこの時期名古屋帝国大学の研究で特筆すべきは、地域社会からの研究援助です。一九四一(昭和一六)年九月、この地方の科学振興のためにと愛知県知事相川勝六から出された六十万円の寄付金をもとに「愛知県科学技術振興会」が発足、渋沢が学術委員長に就任しました。この会は、航空機関係のほか食糧増産にも研究の重点をおいて、三年間をめぐりに資金を支出して、理工学部のほか高等工業学校や各種試験所の研究援助をおこないました。理工学部は創設当初であり研究費が乏しかったため、これらの資金により相当の研究成果をあげることができました。しかし三年後には、完成の域に近く即戦力に役立つ研究を除いて、打ち切られたようです。このほか戦時科学研究に対しては、おもに奨学資金の名目で民間財団からも多く資金援助や寄付がおこなわれていました。

ところで愛知県科学技術振興会は、単に科学技術の向上という現実的な研究に寄与しただけ

化学談話会 (第2回)

日時 昭和17年11月19日 15時半

場所 名古屋帝國大學理學部化學教室
第412號室

演題 地球化學と陸水學の進路に就て
菅原 健 氏

Handwritten notes in Japanese, including a chemical structure diagram of a complex organic molecule with various substituents and a small box at the bottom containing the text "花畑会分館".

Handwritten notes in Japanese, featuring several lines of text and a small diagram or list of items.

Handwritten notes in Japanese, including a list of names and dates, such as "1942.7.20" and "1942.7.21".

郷土科學者傳記叢書 第一編

細胞科學の犠牲者

吉 雄 南 阜

愛知縣科學技術振興會

郷土科學者傳記叢書第一編

尾張本草學の巨擘

水 谷 豊 文

愛知縣科學技術振興會

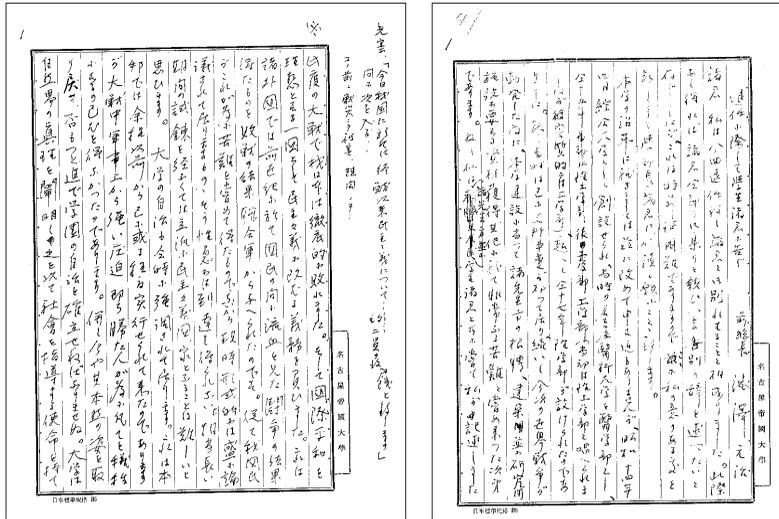
【図16】化学談話会の通知や記録(上、1942年)と愛知県科学技術振興会の刊行物(下、1943-1944年)。山崎一雄氏提供。

ではなく、この地域の科学技術の発展に寄与した歴史的人物を再評価する活動もおこなっていました。たとえば、医学の伊藤圭介、本草学の水谷豊文、化学鉄砲の吉雄南阜の三人を、この地域の郷土三大科学者とし、郷土科学者伝記叢書などを刊行しています。単なる科学発展だけではなく、その背景にある歴史をも探ろうとしているところは、後述する渋沢の歴史への関心と共通するところがあると思われます。

◆総長退任

敗戦後渋沢は、今度は大学復興の基礎作りに尽力しました。敗戦二週間後の八月二七日には、被災状況と復興計画予算を作成して文部省に提出していました。九月一〇日には文部省に赴いて、大臣や関係各局課長と面会、予算はじめ復興のためのさまざまな要求を行っています。GHQ／SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の指示により、航空に関する教育・研究が全面的に禁止され、名古屋帝国大学航空医学研究所が一九四六（昭和二一）年一月に廃止されましたが、その間渋沢は、文部省にその存続を請願し、環境医学研究所への改組を申請していました。その結果、三月三〇日には、環境医学研究所が名古屋帝国大学に付置されています。

このように敗戦後も渋沢はその復興に走り回っていました。しかし老齢と健康上の問題があり、同年一月三十一日総長を辞任することになりました。渋沢は退任の翌二月一日付けで「退



【図17】1946年 総長退任時の「退任に際して学生諸君に告ぐ」原稿

任に際して学生諸君に告ぐ」という文章を残しています。本来は退任式をおこなって、学生全員を集めて直接別れの言葉を述べるのですが、敗戦直後であり学生たちは自身の毎日の生活で手一杯であり、そのようなことは到底不可能でした。そこで渋沢は学部長に代読してもらう事を願い、このような文章を残したのです。

この文章の内容は多岐に渡っていますが、注目したいのは渋沢が時局が大転換しても、それに冷静に対応して考えていることです。戦中大学の自治が犠牲にされたのは止むを得なかつたと主張する一方で、今後の日本の民主主義については「相当長い期間の試練を経なくては立派な民主主義国家となることは難しいと思います」とみています。そして戦前

から大学建設にあたり主張してきた「以和為貴」「進吾往也」を、この戦後においても一貫として変わらないものとして、大学の自治を確立するために饒別の辞として残しておきたいといっています。また、第一次大戦において航空機とラジオ（電波）が、第二次大戦においては原子力と極超短電波が発達したと、戦争が科学技術の飛躍的進歩をもたらしたと工学者らしく冷静に分析しています。もちろん電波が兵器として使われたことは遺憾至極であり、また原子力が悲惨な災害を蒙らしめたといっていますが、一方で原子力が人類の福祉増進に用いられるよう希望も述べています。このように渋沢は、敗戦後の民主主義の潮流に安易に乗り替えるようなこともなく、相変わらず戦前からの自己主張を継続し、戦争が科学技術の飛躍的進歩をもたらしたことを、価値判断はひとまずおいても、その事実を冷静に述べるなど、当時の「民主主義勢力」から糾弾されかねないような姿勢を平然ととっていたのです。その是非はともかく、ここに彼の考え方を垣間見ることができます。

なお、後任の総長には、前名古屋医科大学学長で当時医学部長であった田村春吉が就任しました。

《コラム》 岡崎高等師範学校（岡崎高師）

岡崎高等師範学校は、理科系中等教員養成のために一九四五（昭和二〇）年四月に設置されました。岡崎市から寄付された旧岡崎市立工業学校の校地・校舎を使用する予定でしたが、入学式直前の七月二〇日深夜の大空襲でそのほとんどが焼失しました。その後、豊川市の旧豊川海軍工廠工員養成所と同寄宿舎に移転

しました。

同校は、一九四九年五月、新制名古屋大学に包括されて名古屋大学岡崎高等師範学校となった後、一九五二年三月末に閉校し、学籍関係や附属中学・高校は名古屋大学教育学部に引き継がれました。この間わずか七年間でしたが、六百名余の卒業生を送り出しています。



【図18】 岡崎高等師範学校（都築亨氏提供）



【図19】机がわりの弾薬箱：戦後、振風寮で使われていました。「岡崎高等師範学校／番号5」というラベルが貼られています。もとは豊川海軍工廠で生産した機銃弾を運ぶためのものが、戦後転用されたものです。中にノート類などを入れ、ふたが机の天板となりました。

丸イス：岡崎高師の化学実験室で使用されたもので、その後東山キャンパスの旧教養部時代まで使用されました。「岡崎高師」の焼印がみられます。(以上、加藤貞夫氏提供)

定規：「岡高師教務課用」と書かれ、裏には「工具養成所」の焼印もあります(教育発達科学研究科提供)。

四 渋沢元治 — 生い立ちと人柄・思想 —

◆ 渋沢家と渋沢栄一

渋沢元治は一八七六（明治九）年一〇月二一日、埼玉県大里郡八基村大字血洗島（旧武蔵国榛沢郡血洗島村、現深谷市血洗島）に生まれました。母は貞、父は養子で市郎といいました。渋沢家は江戸時代から榛沢郡一帯では名家であり、本家は「中の家」と通称されていました。

母貞はこの本家の人で、母の兄（元治の伯父）が、渋沢栄一（栄二郎）にあたります。「日本の近代資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一は、青年期に「尊王攘夷」思想の影響を受け、いわゆる「草莽の志士」として郷里を離れ、一橋慶喜（後の十五代徳川将軍）に任せ、水戸藩主徳川昭武に随行しパリの万国博覧会を見学するほか欧州諸国の実情を見聞し、先進諸国の内情に広く通ずるようになりました。明治維新後欧州から帰国した栄一は、招かれて明治政府の大蔵省に入ります。その後大蔵省を辞し、一民間経済人として活動、第一国立銀行の総監役（後に頭取）となり、この第一国立銀行を拠点に、株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ、また「商業と道徳の一致＝道徳経済合一説」を説き続け、生涯に約五百もの企業に関わっ



【図20】現在の渋沢元治の生家（埼玉県深谷市血洗島）

たといわれています。

このように栄一は、長く地元を離れていたため、妹貞が養子を貰い渋沢本家を継いでいたのです。ですから元治は、渋沢本家に生まれたこととなります。

◆埼玉から東京へ

元治は三才で姉とともに漢学塾に、四才から小学校に通う（通常は六才）など、小さいときから利発でしたが、兄と一緒にいたずらするなど、周りをハラハラさせてもいたようです。その後一八八七（明治二〇）年の学制改革もあつて、家から四キロも遠くにある榛沢高等小学校の第三年級に編入学しました。二才年下のハンデがあつたにもかかわらず、学校の成績は常にトップクラスで、特に記憶

力がよく、歴史や地理が好きでした。ただせっかく学業がよくても、小柄ですばしつこく、いたずらつ子でしたため、操行点（生活評価）はよくなく、一番にはなれなかつたようです。

一八八九（明治二二）年三月に高等小学校を優秀な成績で卒業しました。前述したように渋沢家は名家ですから、高い学問を修めるのは当然のことのように思われますが、父市郎は、元治が渋沢家の跡取りであるから、田舎で農業をするのに学問はいらないといって、元治の進学にはあまり気が進まないようでした。しかし本人が進学を希望し、母や伯父栄一もそれに賛成していました。当時尋常中学校は埼玉県にはなく、東京でも私立が数校、公立は東京府立尋常中学校一校しかありませんでした。そこで元治は、伯父栄一の娘琴子（元治のいとこ）の嫁ぎ先である東京麹町平河町（現千代田区）の阪谷家に書生として入ることになりました。

はじめ私立成立学舎に入学、一二月に入学試験に合格して、東京府立尋常中学校の第二学年に編入しました。三年後の高等中学校進学の際も、父はやはり進学に反対でしたが、この時も元治は母から父や伯父栄一を説得してもらい、大学は農科へ進んで卒業後は家に帰るという約束で進学を許可されました。しかし学校の成績はあいかわらず操行点がよくなく、学校推薦では東京の一高ではなく仙台の二高を受けさせられるため、このまま実家に近い東京で進学したい元治は、入学試験を受けることになります。しかし試験当日急性大腸カタルにかかり受験を断念、浪人して日本中学校の五年に編入、一年後の一八九四（明治二七）年にやっと第一高

等学校の第二部農科に進学しました。



【図21】1894年一高入学時の渋沢元治（右）と1897年の卒業証書（左）
通常6・7月の卒業が病気のための追試により10月に遅れました。

◆第一高等学校

渋沢が進学した年、四年制の第一高等学校は三年制の第一高等学校となつたため、昨年入学した同級生と同級に編入されることとなりました。入学は一年遅れましたが、結果として卒業は皆と一緒に遅れず卒業できる形になりました。

旧制高等学校は一年次は寮生活であり、渋沢も寮生活を送り、その自由さを楽しみました。寮では度々茶話会が開かれましたが、年に一度全寮茶話会が開かれ、校長や先輩教授による自治寮についての話が渋沢の記憶に深く残つたようです。前述した名古屋帝国大学総長時代に学生寮で総長懇談会を開いたのは、この時の経験によるものとも考えられます。ただもともと胃腸が弱かつたので、食事や不規則な生活によつて体調を崩すことが多かつたため、二年次

は再び阪谷家から通学し、二年三学期になり、また復寮しています。

ところで受験して入ったのは農科でしたが、どうしても気が進まないもので、ここで再び家族を説得、三年になると工科へ転科してしまいました。渋沢は、頑固だが意志を誠実につらぬく努力家でしたので、まわりによく慕われたといわれていますが、ここまでみてきた彼の進路選択にもそれがうかがえます。

成績は優秀で、渋沢の第二部第三組（学級）には四十人ほどの学生がいましたが、席次は五番を下らなかつたそうです。また三年次に工科に転科してから一度だけ首席をとりました。またスポーツでは野球やボートが好きで、特に能力的に秀でていたわけではありませんが、学生としてそれなりに楽しんでいたようです。ところが三年三学期の一八九七年（明治三〇）五月、またしても病氣（腸チフス）入院をしたため、六月の卒業試験をうけることができなくなつてしまいました。そこで九月退院後、ひとりだけの追試験をうけることになり、こうしてやつと卒業できました。

◆東京帝国大学工科大学

渋沢の進学希望は電気工学でしたが、病氣入院のため、大学入学の手続きが遅れてしまいました。渋沢が手続きしようとした時は、東京帝国大学工科大学電気工学科は定員二十一名の入

学者がすでに決まっついて、渋沢の入る余地はありませんでした。ところが運のよいことに入学者の一人が休学することになり、欠員ができました。入学希望者が渋沢のほかにもうひとりいたため入学試験をおこなった結果、渋沢は見事に合格しました。当時高等学校から大学への進学は試験がなかったたので、入学試験をして大学に入ったきわめて珍しいケースでした。いままで述べてきたように、進学や卒業のすべてに際してすんなり事が運ばない一方で、なんとかクリアもしてきたところに、渋沢の実力がわかります。

大学在学中は、荒川文六（のちの九州帝国大学総長）や小平浪平（のちの日立製作所創始者）らとの交友を深める一方で、勉強にも積極的で余念がなかったようです。第三学年になると実習を行うのですが、渋沢は小田原馬車鉄道会社の電化工事の実習に出ました。そこで回転変流機の設置に携わるなかで、回転変流機の極性変移の理論を考えだし、それを卒業論文にしました。これは電気学会の講演で発表され「電気学会雑誌」にも掲載されました。さらにその後石川島造船所へやはり実習に行き、国産第一号の回転変流機を設計・作成もしました。

こうして渋沢は一九〇〇（明治三三）年七月、荒川文六に次ぐ第二席で東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業しました。



【図22】1903年 留学中のスイス・ユングフラウ氷河上の渋沢（右）

◆一年志願兵と海外遊学

渋沢は卒業してすぐに就職することはせず、まずは徴兵検査をうけて、徴兵義務を果たしておこうと考えたようです。八月の徴兵検査では、その時うけた百人あまりの中、たった七人しかいなかったといわれる「甲種合格」でした。一二月に中野工兵隊鉄道大隊第三中队に一年志願兵として配属されました。

第三中队は電信隊であり、架線作業などの業務に携わりました。その中でも二重電信（同じ電線を使って往復送受信できるようにすること）の試験を任せられ、それに成功したことは、渋沢にとっては大きな喜びであったようです。このような軍隊生活の中で、渋沢は実習における技術習熟の大切さをさらに確信していったという評価もされています。

除隊後、一年間古河鋳業足尾鋳山所に勤務しますが、一九〇二（明治三五）年には伯父栄一に随行して海外留学をします。大学卒業から入隊する間にも、伯父栄一に付き添って約一ヶ月ほど朝鮮旅行をしています。今回は四年近くにもなった本格的な留学でした。

五月に日本を発ち、アメリカ・イギリスを経て八月にはドイツ・ベルリンに到着、伯父栄一と別れてここに長期滞在し、電機会社ジーメンズ社シャーロットンブルグ工場で実習経験を積むとともに、地元の工科大学に学んでいます。一年後ここを辞めた後、一〇月からはスイスのチューリッヒ工科大学の聴講生となり、今度は水力発電について学びました。翌年四月にスイスを発ち、イタリア・フランスをまわった後、五月から二ヶ月イギリスに滞在、七月から再びアメリカに渡ります。セントルイス万国博覧会の電気機械部門の審査員を経た後、一〇月からアメリカの大手電機会社GEの試験場で実習をしました。しかし実習生といっても数百人もおり、その多くが大学の卒業生で、工場の一員と同じように重い責任を負う仕事を任されるものでした。そこで渋沢は、普通は教育の有無が技量に現れるが、アメリカでは大学を出たからといって区別されるのではなく、技量の違いで区別されると回想しています。

なお一九〇五（明治三八）年七月にはハーバード大学の夏期講習を受講しています。このほか、長期滞在していた間に小旅行などもしています。こうして得た海外の知識は、就職後の渋沢が関係した日本の電気行政の国際化に大きなプラスになったものと思われれます。



【図23】1906年 妻孝子との結婚写真

◆ 逓信省電気試験所

一九〇六（明治三九）年一月に帰国、四月に東京帝国大学教授穂積陳重の娘孝子と結婚しました。ついで五月から逓信省電気試験所に勤めはじめました。

逓信省勤務時代の渋沢の功績は数多くあります。たとえば一九〇九（明治四二）年電気学会が主体となつて日本電気規格調査会を組織しましたが、渋沢は創設以来この中の委員として、電力計量の規格の統一に努めました。また電気事業行政の技術面を定めるため一九一一（明治四四）年九月に公布された「電気工作物規程」の原案作成に際し、その主査を努めていました。同規程は工作物に用いる主な器具、材料の規格・施設方法を詳しく規定し電気保安に大きく役立ちました。

その後一九一四（大正三）年に電気試験所第一部長に、一九一七（大正六）年に同試験所第三部長に就任し、さらに一九一九（大正八）年一〇月逓信省電気局技術課長に任命されました。いわゆる管理職になったのですが、この時期にも一九二〇（大正九）年には電気主任技術者制度を六段階（六級）から三段階

(三種)に分ける改革を実施したり、高圧送電線の電圧を十五万ボルトに決定したり、周波数の統一にも尽力しました。

このほか水力電気事業の推進したり、一時鉄道院技師として鉄道の電化などを行政面から指導したり、また電気産業の技術発展にも関わりました。また海外へもたびたび出かけており、一九一八(大正七)年の二月から九月にかけて電気事業調査のため米国・カナダへ渡ったり、一九二一年(大正十)年七月には、パリの第一回万国送電網会議への出席と、欧米の電気事業の統制事情を調査のため、欧米諸国へ出かけています。就職前の留学経験を含め、これらの経験は渋沢の関与した電気行政の「国際規格」を考える際にプラスとなりました。

◆東京帝国大学教授

こうした電気行政に携わる一方で、自らの研究においても研鑽を重ねていました。一九一一年(明治四四)年「同期電機機」の特性」で工学博士の学位をとり、一九一八(大正七)年四月に、東京帝国大学工学部電気工学科講師(兼任)に、翌年七月には同大学教授(兼任)となりました。

そして一九二四(大正一三)年十一月、東京帝国大学工学部の専任教授となり、翌年三月には逓信省電気局技術課長を退官しました。前年の関東大震災により自己の研究どころではなく、

まず学生の教育と実験室の整理に追われ、さらに翌年になると主任教授が病床についたため、その代理として教室内全体の世話に奔走したと、澁沢はこの頃のことを回想しています。

一九二九（昭和四）年からは工学部長に就任したのち、一九三七（昭和一二）年に停年退官しました。専任教授に就任した一九二四（大正一三）年には電気学会会長を勤め、また停年退官した翌一九三八（昭和一三）年には電気工学の分野では初めての日本学士院（当時は帝国学士院）会員となりました。そのほか一九二九（昭和四）年には米国電気学会名誉会員になるなど、諸学会の活動に貢献しました。

このような経歴ののち、一九三九（昭和一四）年、新設された名古屋帝国大学に、総長として赴任したのでした。

◆著作活動

名古屋帝国大学総長を辞めたのち澁沢は、ふるさと埼玉県深谷市の生家へ健康回復のために戻り、病氣療養をしていました。ふるさとに戻ったことがよかつたのでしょうか、しばらくすると健康も回復したので、学会などさまざまな活動に再び戻りました。

なかでも、精力的な執筆活動が目につきます。澁沢はすでに大学教授の時代から『現代生活に於ける電気』『電力問題講話』『電界百話』『電力応用講話』など自らの専門である電力関係



【図24】数々の渋沢の著書（一部）

についての著書を多数執筆していました。総長引退後も『送電工学総論』『電界随想』などを著しています。そのなかで特徴的なのは、『現代生活に於ける電気』『電界百話』『電界随想』など、専門書でなく電気関係を題材にした随筆類を多く執筆し、また雑誌などにも電気関係の連載やエッセイ類を多数寄稿していることです。なかでも特筆すべきは、通信省電気局技術課長在職中の一九二一（大正一〇）年に小学校国定教科書に自ら書いた「電気の世界」という文章で、これは電気事業が発展して電気が生活必需品となっていくので、電気の知識を子どもたちから普及しようと、渋沢自身が提案したものだそうです。むずかしくて専門的なものだと思われがちな電気や電力などの話を、わかりやすく説明する

ことによつて、広く一般に電気や電力にもつと親しんでもらいたいという澁沢の考え方がよくわかる事例です。そのほか総長引退後の著作として『五十年の回顧』や『思い出の随想』などの自伝も書いています。

同時にまた歴史にも深い関心をもっており、名古屋帝国大学総長時代にも、総長式辞や訓示などで、東海地方出身で著名な歴史的人物である徳川義直・細井平洲・本居宣長らを度々紹介しています。また、最後の著書である『思い出の随想』においても、やはり東海地方出身の松尾芭蕉・渡辺華山について書き記しています。前述しましたように、幼少の頃から歴史には興味をもっていたこともあったのですが、澁沢が単に理系だけではなく、文系の知識も兼ね備えていた文化人でもあったことがわかります。こうなると単なる研究者というだけではない、随筆家あるいは文筆家でもあったのではないかと思われれます。

◆文化功労賞と澁澤賞

澁沢は一九五五（昭和三〇）年電気関係者としては初めて文化功労賞を受賞しました。電気事業行政および電気工学技術研究教育において、澁沢の功績が評価されたわけです。名古屋大学の関係者としては、前年の第三代総長勝沼精蔵に続き、二人目の受賞者となりました。

この受賞を記念して、澁沢と縁のある方々が中心となって基金が集められ、社団法人日本電



【図25】 澁澤賞受賞者に渡された賞額（レプリカ、左）と渋沢直筆の色紙（右）

気協会内に「渋沢元治博士文化功労賞受賞記念事業委員会」が設けられ、電気設備保安事業に功績があった人を表彰する「澁澤賞」が制定されました。文化功労賞受賞の翌一九五六（昭和三一）年が第一回であり、以後毎年表彰がおこなわれています。生前渋沢はこの澁澤賞授与式には必ず出席し、「和」と書かれた色紙を受賞者一人一人に署名して贈っていました。

白寿（数え年九十九歳）の祝いをするほど長生きをしましたが、一九七五（昭和五〇）年二月に逝去しています。



おわりに

【図26】 渋沢元治の生家内、渋沢国際学園にあった「澁澤元治記念館」

名古屋大学は、戦中というむずかしい時代に発足しています。医学部と理工学部のみで、理系中心で、航空医学研究所の設置や軍事教練の導入にみまされたように、当時の国策に一見沿った面もたしかにうかがえます。しかし、一方では国策に左右されずに、純粹に大学における学問研究を追求していかうと姿勢も捨てられることなく維持されていたといえます。それは「以和為貴」「進吾往也」という渋沢が好んだ書にもみえるような気がします。また、単に研究のみを追求していたのではなく、鏡が池の滝ほか「緑の学園」や陸橋設置構想にみるように、ゆ



【図27】2002年 名古屋大学博物館第4回特別展ポスター

とりある学園環境を重視していました。また、渋沢は歴史にも関心が深く、名古屋の歴史風土にあった大学を構想していたとも思われます。これら名古屋大学の初期、渋沢総長を中心にした名古屋帝国大学時期の大学発想は、現在の大学にも必要不可欠な課題ではないかと思われます。

渋沢が亡くなった後、遺族の方がその遺志を受け継ぎ、一九八五（昭和六〇）年に、深谷市の生家敷地内に、外国人留学生の日本語教育をおこなう「渋沢国際学園」を開校しました。この学園の中に「澁澤元治記念館」が建設され、遺品ほか渋沢の関係資料が、ここに大切に展示・保管されていました。しかし残念なことに、その遺族の方も亡くなり、これらの資料の維持管理をこのまま継続しつつ

けることが難しくなりました。その後数多くの関係者のご懇意ご協力により、二〇〇一（平成一三）年一〇月に名古屋大学大学史資料室へこの資料が移管されました。この資料をもとに二〇〇二（平成一四）年四月から八月にかけて名古屋大学博物館と大学史資料室が共催で博物館第四回特別展「名帝大けふ誕生―初代総長 渋沢元治とその時代―」を開催しました。本書は、この展示をもとに、さらにいくつかの知見を加えて、まとめなおしたものです。

〈引用文献・参考文献等〉

- 『名古屋大学五十年史 通史一』（名古屋大学、一九九五年）
『名古屋大学五十年史 部局史一・二』（名古屋大学、一九八九年）
『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』（名古屋大学、一九九一年）
渋沢元治『我等の學園』（一九四三年）
渋沢元治『五十年の回顧』（渋沢先生著書出版事業会、一九五三年）
渋沢元治『思い出の随想』（渋沢先生白寿記念会、一九七四年）
朝倉健太郎・安達公一「電子顕微鏡をつくった人びと」（医学出版センター、一九八九年）
勝沼精蔵・山元昌之『病院防空―戦跡と戦訓―』（一九四五年）

木方十根 「創設期の東山キャンパス計画 ― 営繕顧問・内田祥三の資料を中心に―」 (『名古屋大学史 紀要

第六号』名古屋大学史資料室、一九九八年)

椎尾久子 「在りし日の思い出」 (『八高五十年誌』八高創立五十年記念事業実行委員会、一九五八年)

永塚利一 『濫澤元治』 (電気情報社、一九六九年)

本多静六・稲垣龍一 『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』 (一九三九年)

『中央製作所五十年史』 (株式会社中央製作所、一九八六年)

『八高の先生がた』 (八高八十年祭記念基金委員会、一九九二年)

略年表

| 年月 | 名古屋大学関係 | 渋沢元治関係 |
|-------|---------------------|--------------------|
| 一八七一年 | 仮病院・仮医学学校設置 | 埼玉県大里郡八基村大字血洗島にて生誕 |
| 一八七六年 | | 上京、私立成立学舎に入学 |
| 一八八九年 | | 東京府立尋常中学校に編入学 |
| 一九〇四年 | | 第一高等学校第二部農科に入学 |
| 一九〇四年 | | 工科に転科 |
| 一九〇六年 | | 第一高等学校卒業 |
| 一九〇七年 | | 東京帝国大学工科大学電気工学科に入学 |
| 一九〇〇年 | | 東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業 |
| 一九〇〇年 | | 入隊 |
| 一九〇一年 | | 古河鋳業足尾鋳山所に入所 |
| 一九〇二年 | | 伯父渋沢栄一に同行して欧米留学 |
| 一九〇三年 | 愛知県立医学専門学校に昇格（愛知医専） | |
| 一九〇六年 | | 帰国 |
| 一九〇八年 | 第八高等学校創立（八高） | 結婚 |
| 一九一一年 | | 通信省電気試験所に勤務 |
| 一九一四年 | 愛知医専、現鶴舞キャンパスへ移転 | 「同期電機の特性」で工学博士学位取得 |
| 一九一八年 | | 東京帝国大学工学部講師（兼任） |
| 一九一九年 | | 東京帝国大学工学部教授（兼任） |
| 一九二〇年 | | 通信省電気局技術課長 |

| | | | |
|------|----|--------------------------------------|---------------------------|
| 一九二〇 | 七 | 愛知医専、県立愛知医科大学に昇格 名古屋高等商業学校創立（名高商） | 東京帝国大学工学部教授（専任） 電気学会会長 |
| 一九二四 | 一一 | | 東京帝国大学工学部長 |
| 一九二九 | 四 | 愛知医科大学官立名古屋医科大学に移管 | アメリカ電気学会名誉会員 |
| 一九三一 | 五 | 名古屋帝国大学創立 | 東京帝国大学工学部停年退官 |
| 一九三七 | 三 | 理工学部設置 | 帝国学士院（現日本学士院）会員 |
| 一九三八 | 四 | 第一回創立記念式 | 名古屋帝国大学総長 |
| 一九三九 | 四 | 愛知県科学技術振興会発足 | |
| 一九四〇 | 五 | 学生寮設置、総長懇談会はじまる | |
| 一九四一 | 九 | 理工学部、理学部・工学部に分離 | |
| 一九四二 | 一 | 東山キャンパスオープン | |
| 一九四三 | 二 | 航空医学研究所附置 | |
| 一九四五 | 三 | 開学式挙行 | |
| 一九四六 | 四 | この頃、空襲が激しくなる | |
| 一九四七 | 五 | 岡崎高等師範学校創立（岡崎高師） 敗戦 | |
| 一九四七 | 〇 | 環境医学研究所附置 名古屋大学（旧制）に改称 | 名古屋帝国大学総長を退任 |

| | | |
|--|--|---|
| <p>一九四八 一〇 一九四九 四 一九五〇 三 一九五一 四 一九五五 一 一九五六 一 一九七四 二 一九七五 二 一九九三 〇</p> | <p>文学部・法経学部設置 新制名古屋大学設置、八高・名高商・岡崎高師を包括、 教育学部設置 法経学部、法学部・経済学部に分離 農学部設置 情報文化学部設置</p> | <p>文化功労賞受賞 第一回澁澤賞表彰 白寿 逝去（享年百歳）</p> |
|--|--|---|

名大史ブックレット6

草創期の名古屋大学と初代総長渡沢元治

二〇〇三年三月三十一日 第一刷発行

著者略歴

神谷 智 (かみや さとし)

一九五七年 愛知県生まれ

一九九一年 名古屋大学大学院文学研究科

博士課程(後期課程)単位取得退学

現在 名古屋大学史資料室助手

専攻 記録史科学

著者 神谷 智

(協力・名古屋大学博物館)

編集 名古屋大学博物館

名古屋大学史資料室

発行 名古屋大学史資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二(七八九)二〇四六

印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一〇

電話 〇五二(八七二)九一九〇



表紙表：1943年5月開学式に配布された絵はがき。
当時の名古屋帝国大学の建設計画を反映
した完成予想図。

表紙裏：初代総長 洪沢元治